

新しい世界史像…古代文明は四大文明だけだったかどうか

安田 喜憲

『西洋の没落』と『環境文明論』

今日は、新しい世界史像ということで、お話をさせていただきました
と思います。

O・シュペンゲラー (Oswald Spengler) という人が一九一八年と一九二二年に『西洋の没落…世界史の形態学の素描』(第一卷)『世界史的展望』(第二卷)』(Der Untergang des Abendlandes) という本を書きました。A・トインビーもこのO・シュペンゲラーの影響を受けました。『西洋の没落』の翻訳は村松正俊さんという人がなさって、五月書房という出版社が刊行いたしました。⁽¹⁾ そのO・シュペンゲラーのニュー・エディションを刊行した後に、私の本を刊行する計画で、宣伝まで出しました。梅原猛先生が序文

まで書いてくださいました。ところが五月書房は、O・シュペンゲラーの『西洋の没落』のニュー・エディション⁽²⁾を出して、自社も没落してしまったのです。困っておりましたら、論創社という出版社から「出してやろうか」というお誘いがあり、それで出していた本がこの『環境文明論…新たな世界史像』⁽³⁾でございます。

O・シュペンゲラーが一〇〇年以上前に「西洋は没落する」ということを言ったんですけども、それが二二世紀の前半に現実のものとなってきたのではないかと私は思っています。イギリスがEUを離脱いたしました。これで明らかに、「西洋の没落が始まった」というのが、私の考えでございます。東欧のポーランド

や中東やアフリカの国々から、豊かな生活を求めて、安い労働賃金で働く人がやって来る。シリアから難民がやって来る。このために、自分たちの職が奪われるという不安から、イギリスはEUから離脱する道を選択したのです。

地中海世界を席卷したローマ文明没落の原因は、ゲルマン民族の大移動でした。もちろん民族大移動には気候変動などいろいろな要因がかかわっていますが、結局豊さを求めてのゲルマン民族の大移動だったと思います。民族の大移動がヨーロッパ文明を崩壊させるのです。O・シュペングラが西洋の没落を一〇〇年前に予言してから、いよいよEU諸国を含む西洋は没落へと向い始めたと私は考えております。

伊東俊太郎と池田大作

伊東俊太郎先生が一九七四年に『人類文化史2』⁽⁴⁾という本を刊行されました。その本の中で伊東先生は「近代における西欧の世界支配は数千年にわたる文明史の叙述をはなはだ偏ったものにしてしまった。今や西欧の時代が終わり、真の意味での人類の時代が到来しようとしているとき、このような西欧中心の世界史のゆがみがただされなければならない」と書いておられます。私がまだ大学院の学生の頃に、すでにこういうことを指摘されている。

当時の日本の歴史学会はマルクス史観という歴史観に支配されていた時代です。

まだまだ「マルキストでなければ人に非ず」という時代でした。そんな時代によくぞこうしたことを言われて、そして今でも伊東先生は元気で生き残っておられます。

当時マルキストを批判すると「お前必ず仕返しされるぞ。覚悟しておけ」と言われました。ところがその仕返しも伊東先生は飄々と受け流し、荒波を見事に乗り越えてこられた。そして今、伊東先生の文明論は正しかった。未来に先駆ける文明論だったということを多くの人が理解するようになった。廣池千九郎先生を創設者とする麗澤大学が、伊東先生の文明論の重要性を見抜き、比較文明研究センター（後には比較文明文化研究センター）まで作っていたのだ。

私は広島大学で長いこと助手をしておりました。一九八七年二月に梅原猛先生から電話がかかって来ました。私の『世界史のなかの縄文文化』⁽⁵⁾を読んでいただき、自分とよく似た大胆な仮説を提示する男がいるということでお電話いただいたのです。その大胆な仮説とは、「縄文は文明だ」ということです。ちょうど国際日本文化研究センターができたところで、人をさがしておられた梅原猛先生は「君を国際日本文化研究センターの助教授として

採用しようと思うのだがどうかね」とおっしゃいました。広島大学総合科学部では学部長殺人事件があり、万年助手まで覚悟していた私には、それは神の声に聞こえました。そして一九八八年四月にやっと国際日本文化研究センターの助教授として採用されました。そこで私は何かしなければいけないと思っていました。ちょうど伊東俊太郎先生が一九九〇年に東京大学から国際日本文化研究センターに来てくださるということが分かったので、伊東先生を担いで、「文明と環境」というプロジェクトをやらしていたのだのです。⁶⁾

それからずっと今日まで、伊東俊太郎先生の教えを受け、麗澤大学比較文明文化研究センターの客員教授にまでしていただきました。本当にありがたいことだと深く感謝いたしております。

やっと近年になって世界史を研究する研究者もこの伊東先生の欧米中心主義と闘う世界史の重要性に目覚め、羽田正氏⁷⁾は「現代にふさわしい新しい世界史を構想しなければならぬ。」として「現代日本における世界史の見方の最大の問題は、(中略)、ヨーロッパ中心史観である」と指摘されるようになりました。朝倉書店から刊行した「講座文明と環境」(全一五卷)⁶⁾のシリーズは現在でも参考になると指摘してくれています。⁸⁾日本の世界史観も大きく変わろうとしていると思われれます。

本当にありがたいことです。同じ事を言い続けることで、世の中は少しは変わってきたということを実感します。伊東先生が主張されてから五〇年、「講座文明と環境」が刊行されてから実に二〇年以上の歳月がかかりました。

それからもう一人、池田大作先生⁹⁾がいらっしやいます。池田先生は創価学会という宗教教団のトップの方です。比較文明の分野では、池田先生とA・トインビーとの対話が有名です。しかし、池田先生からA・トインビーに会いたいと言われたわけじゃない。松下幸之助先生のご推挙でA・トインビーの方から、池田先生に会いたいと言ってやって来たのです。そして今やSGIという創価学会の機関は、新しい平和の時代を作るんだということで、核戦争に反対し、全世界的に人類の平和をもとめる活躍をされている。特定の新興宗教と深い関係があるため、なかなか比較文明学のアカデミーの世界では評価されません。しかし比較文明学会では、この池田大作先生の評価をもうすこししないといけないのではないかと、私は思っております。廣池千九郎先生¹⁰⁾は言うに及ばず、宗教と文明のかかわりの研究は、未来の比較文明学研究にとってなくてはならない課題になるでしょう。

そしてレヴィ・ストロース。この間、ブラジルのサンパウロ市へ行き、レヴィ・ストロースのご研究では群をぬいておられる渡

辺公三氏¹¹と、その足跡を訪ねました。やはりレヴィ・ストロースは、南米の熱帯雨林の中にいる少数民族の人々もちゃんと文明を持つてゐることを指摘していた。欧米の人々のあいだにも、自分たちの物質エネルギー文明の限界を意識し、新しい世界史や文明史を構築することの必要性を直感的に感じていた人が多くいることを、私たち日本人は知らねばならないでしょう。

アジア的生産様式とキリスト教

第二次世界大戦の敗戦以降、日本の歴史学会は、マルクス史観に呪縛されてきました。そのK・マルクスという人が稲作漁撈社会をアジア的生産様式の代表として、徹底的に弾圧しました。このK・マルクスは『資本論¹²』という本を、大英帝国の図書館で書きました。しかし、アジアの稲作漁撈社会には、一度たりとも足を踏み込んだことがない。にもかかわらず、アジア的な生産様式を踏み込んだことがない。にもかかわらず、アジア的な生産様式の概念は日本では高く評価され、稲作漁撈社会は封建的だと断罪されました。日本の歴史学者の多くはマルクス史観を金科玉条のようにしてやってきた。これが、戦後七〇年間、日本人がまちがった『生き方¹³』をしてきた証となりました。

不思議なことですが、私はキリスト教徒の先生に助けられています。例えば、私の恩師の鈴木秀夫先生¹⁴はプロテスタントで

した。その鈴木先生が私を助けてくださった。吉澤五郎先生¹⁵も同じです。

私は「東洋を復権する。稲作漁撈社会を復権する」と一生懸命言ってきたんですけども、やっぱり、欧米の持っている物質エネルギー文明の良さも吸収しなければいけない。半々ですよ。半分は東洋、半分は西洋。この欧米文明と東洋の文明をうまく融合していけるのは日本しかないんじゃないかと最近思うようになりました。

日本人は第二次世界大戦の戦争に負けて、自信を失いました。戦後七〇年間の中で、一番悪いのは付和雷同する研究者です。人の『生き方¹³』としてはやってはいけないことです。でもそういう学者が実に多い。そういう人を、偉い学者だと思ってる。やってきました。それが日本の社会をおかしくしたのではないのでしょうか。

人のトップに立つ人間は、未来が読めないといけません、未来が読めない人がリーダーになった時には、その下にいる人は苦労する。伊東俊太郎先生はもう五〇年以上前に、今と同じことを言っておられた。つまり五〇年後の未来をちゃんと予測しておられたのです。

肥沃な三日月地帯は禿山だった

図1上は皆さんが高等学校の世界史で勉強された「肥沃な三日月地帯」の現在の風景です。肥沃というから、それはどんな所かと思っ行ってみました。これが「肥沃な三日月地帯」の現状です。メソポタミア文明のルーツは「肥沃な三日月地帯」だと教えられました。私はどんな所だと思っ行って見たのです。

ところがそこは禿山の岩だらけの山でした。何が肥沃ですか。禿山の岩山が広がっているだけです。これが世界史で教えられた「肥沃な三日月地帯」です。

シリアのガブヴァレイというところの湿地の花粉分析をやってみました⁽¹⁶⁾。そうしたら、一万年よりも前には、はつきり豊かな森があったんです。だけど一万年前から森が人間と家畜によって破壊されて、五〇〇〇年前にはもう今と同じような岩だらけの禿山になっていたんです⁽¹⁷⁾。

そのことを知った上で、世界史の先生が「肥沃な三日月地帯」と言うんだったらまだいい。そういう説明も無しに、「肥沃な三日月地帯」で文明が誕生したんだと。そんな所へ行っただけなら今は戦争して岩だらけの禿山が広がっているだけ。そんな所を「肥沃な三日月地帯」と言っていたことに大きな誤りがあるわけですね。「かつては肥沃だったけど今は禿山の岩山がひろがっている

だけ。とてもそこでは人間は暮らせない。これが自然を一方的に収奪するメソポタミアではじまった畑作牧畜民の文明原理を示している」と高等学校の世界史の先生は教えなければいけない。これにたいして私たちが発掘調査しました六三〇〇年前の稲作漁撈民の都市型遺跡、中国湖南省城頭山遺跡は、今も肥沃で、そこで農民が暮らしているのです(図1下)。

つまりわれわれが勉強してきた世界史というのは、欧米の畑作牧畜民が作った世界史だったということです。メソポタミア文明・エジプト文明・インダス文明・黄河文明の四大文明は、いずれもパンを食べてミルクを飲んで、肉を食べる人々が作った文明です。黄河文明はパンではありませんけど饅頭ですよ。そして豚肉が大好きです。ミルクも飲みます。それはエジプト文明もインダス文明も、それからメソポタミア文明はもちろんのことです。これは今のヨーロッパ人と同じ、アメリカ人と同じ畑作牧畜民が作った文明なのです。だから欧米人は、畑作牧畜民の文明は理解しやすかったんです。

だけど畑作牧畜民のK・マルクスは、大英帝国の図書館で『資本論』⁽¹⁸⁾を書き、稲作漁撈社会をアジア的生産様式だと言っただけで、彼は東南アジアの稲作漁撈社会にさえ一度たりと行ったことがなかった。そんな人が言っただけを金科玉条のようにし

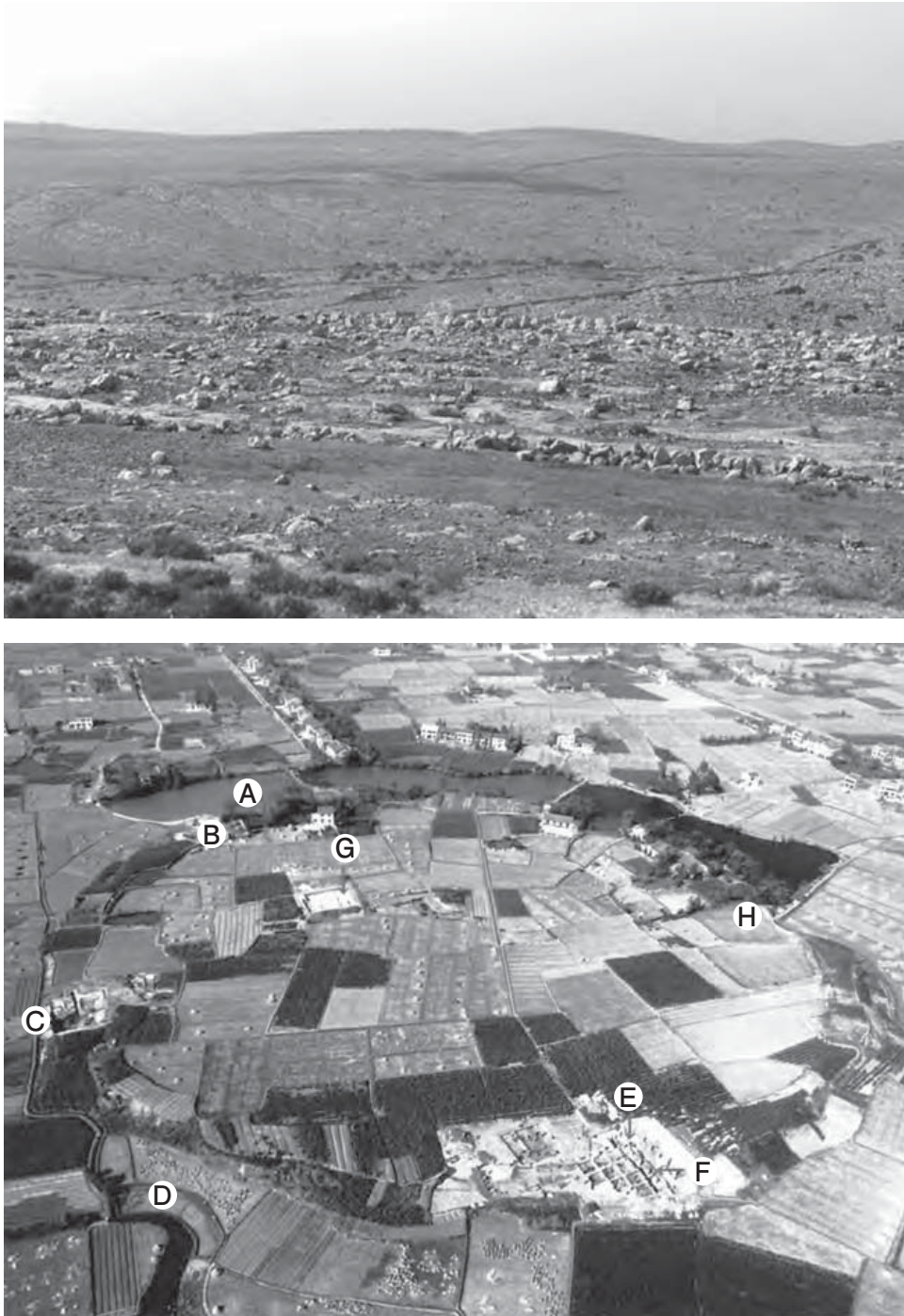


図1 高等学校の世界史の教科書に「肥沃な三日月地帯」として、出ているところは、現在行ってみると岩だらけの秃山だった。シリア北部（上）。ところが同じメソポタミア文明が発展した時代に作られた6300年前の稲作漁撈民の中国湖南省城頭山遺跡周辺は、今でも農民が暮らし豊かな緑が広がっている（下）。A—Hは日中共同で調査したところ。詳細はYasuda Y (ed.) *Water Civilization: From Yangtze to Khmer Civilizations*. Springer 2012 参照。ここに畑作牧畜民と稲作漁撈民のライフスタイルの相違が明白に示されている。

ていたのが、日本のマルクス史観に対して、とりわけ第二次世界大戦に負けた日本人は自信をなくしました。それに対してそんなことはないと言ったのが廣池千九郎先生⁽¹⁰⁾だったり、梅棹忠夫先生⁽¹⁸⁾そして伊東俊太郎先生⁽¹⁹⁾でした。でも大半の歴史学者はマルクス史観にNOと言えなかった。

そのおかしさに私が気づいたのは一九八九年のことです。この会場に来てくださったっている学生さんは、まだ生まれていないときです。私は一九八九年以来ずっと三〇年近く同じ事を言っているんです。それが新しい未来を拓くんだという確信が無かったら同じ事は言えない。

付和雷同する学者は二流なのです。伊東俊太郎先生も、梅棹忠夫先生⁽²⁰⁾も昔も今も同じ事を言われている。同じ事を三〇年間言い続ける。それでやっと世の中、少し変わるんです。同じ事を言い続けなければ、世の中は変わりません。

森・里・海の命の水の循環を守る

私は国際日本文化研究センターを二〇一二年に定年退職しました。その頃は、まだ京都は閑古鳥が鳴いていました。ところが今はもう京都駅へ行ってください。中国語だけじゃない、英語もロシア語も、スペイン語もいろいろな国の言葉が聞こえてくる。二

〇一六年現在の京都駅は雑踏であふれ、世界中の観光客が押し寄せています。これは過去三年の間に引き起こされた現象です。日本人の持っている歴史と伝統文化、そして日本列島の風土、そこから生まれたおもてなしの心や安全性に、やっと諸外国の人もその重要性が分かってきた。

伊東俊太郎先生は一人で果敢によく闘かってこられたなと思います。伊東先生はここまで一生懸命やってこられて、生き延びて来られた。そして梅原猛先生も伊東先生もお元気なんです。それは、サムシング・グレイト⁽²¹⁾のおかげではないかと私は思っています。「この人はやっぱり生かしておかなあかん。日本のため、世界のため人類のために必要だ」と地球上の生きとし生けるものが、力をくれているんだと私は思っています。だから、あれだけの元気が続いているらと思えます。

国際日本文化研究センターを退職した後、「ふじのくに地球環境史ミュージアム」の館長になりました。「ふじのくに地球環境史ミュージアム」と「富士山世界遺産センター」の合同会議の時に、稲盛和夫先生の『京セラファイロソフイ⁽²²⁾』をテキストに使って「ミュージアム・ファイロソフイ」をやりました。ところが、一回目をやった時も、二回目をやった時も、「どうして館長は倫理や道徳をわれわれに教えるんだ」という気持ちで伝わって来まし

た。でもそれにも負けずやり続けた。そしたら三回目あたりから乗ってきたんです。そして今やもう、この会議の前に、必ず一人が一〇ページぐらいずつ発表するんです。それに対する意見のデイスカッションが、もう一時間以上続くんです。そういう時代になってきました。

欠端実先生の本の中⁽²³⁾には、いっぱい美しい棚田がでてきますが、こういう棚田をどうして作れるか。畑作牧畜民、ヨーロッパ文明の一神教の世界に住んでいる人は、そんな急傾斜な所へ行ったら、ヒツジとヤギを放牧して昼寝しとるだけです。でも、稲作漁撈民は違うんです。上から下まで全部水が行き渡る水田を造る。しかも真つ平らの水がたまる棚田を作らなきゃいけない。どれだけ大変な労働か。これはおじいさんの水田、これはお父さんの水田、これは僕のですよと、営々と、大地に自らのエネルギーを投入して不毛の大地を豊かな大地に変えることを繰り返してきました。これが稲作漁撈民なんです。

駿河湾では「桜エビ」というエビがたくさん捕れます。それで私が「富士山の湧水が桜エビを育てるんだ」と言ったけど、なかなか理解してもらえなかった。「どこにそんな証拠があるんですか」と言う。ところが、静岡県環境局の人が調べたら、駿河湾の海底からバナジウムをたくさん含んだ淡水が湧水していたので

す。だから森・里・海の命の水の循環が、東洋の稲作漁撈社会を支えている基本だということです。富山県の富山湾と静岡県の駿河湾はともに「世界で最も美しい湾クラブ」に加盟することを認定された。「シロエビ」の獲れる富山湾と「サクラエビ」の獲れる駿河湾は、紅白のおしどり夫婦として、日本海側と太平洋側を代表する美しい湾として認定された。それは日本人の祖先からの贈り物であった。立山連峰と富士山を擁し、森・里・海の命の水の循環を守ってきたライフスタイルが生み出した宝物でした。

聖なる山があつて、里山を作つて、そこから、命の水が流れ下つて、水田と里を潤し、豊かな海を維持している。生活の基本に命の水の循環があるということ、これが稲作漁撈民の世界的な価値なんです。

縄文は文明だ

私は「縄文も文明だ」と言っています。でもこれに対しては、さすがの伊東俊太郎先生も、「縄文は文明とは言えない」というお考えだと思えます。西日本の縄文文化を研究されてきた矢野健一氏も「縄文研究の課題とは、一言でいえば、文明以前の時代、文化、社会を知ることである⁽²⁴⁾」と指摘されています。こうした一般的理解に対して、私は縄文は文明だと指摘しています。近年⁽²⁵⁾で

は、それは生命文明だとまで言っています。

そして北海道の南茅部遺跡群の垣の島遺跡から出土した縄文の子供の足型をなんども紹介しています。真ん中の小さい子供の足型は両足揃えています。本当に小さいです。生まれたばかりの赤ちゃんの足型ではないかと思えます。時代は縄文時代の前期、六〇〇〇年から七〇〇〇年も前のものです。その子供の足型、ちゃんと壁掛けとか、ペンダントにできるようになっている。どうして縄文人はこんなものを作ったのか。発掘調査を担当した阿部千春氏²⁶は足型をつけた土版は、死んだ子供の足型だと考えた。子供が自分よりも先に死ぬということは親にとっては耐えられないことです。しかも縄文時代は子供の死亡率が高かった。その悲しみをじっとこらえて子供の足型を取って、ペンダントや壁掛けにした。実はこの足型、どこから出土したかという点、大人の墓から出てきたんです。つまり自分が死ぬ時、大人の墓に子供の形見と一緒に埋葬されていたわけですから。

だから、縄文人というのは、ウォーウォーと言って、原始的で野蛮だというのは、これは昔の話です。一万年も同じことをしながら持続した、そこに新しい価値を見つけないといけない。²⁷縄文の持続性と生命への畏敬の念、そのことの重要性が、ようやく分かってきました。

縄文というのが一万年以上続いた。その持続性の中に新しい文明の価値を見出す事は、現代の考古学者も分かってきました。同じ事を一万年間続けるといふことは、どれだけ大変なことか。それを今までは、「縄文人は原始的で野蛮だから一万年続いたんだ」と、そういうふうになんかに割り切っていた。そうじゃないのではないか。一万年続けるといふことはいかに大変な事か。その研究はこれからです。

伊東俊太郎先生は「縄文は文明かどうか、それはまだ分からん」「文明とは都市市民のものだ。福沢諭吉²⁸が Civilization を文明と訳したその CIVIL とは都市市民だ¹⁹」とおっしゃいます。

文明を都市市民だけのものとしたのは欧米の畑作牧畜民です。都市・文字・金属器これが「文明の三要素」だと言われてきました。それをひとつでも欠いたものは文明ではないと見なされてきたのです。たとえばマヤ文明は金属器がありません。マヤ文明は石器の文明でした。²⁹ インカ文明は文字がありません。キープ（紐結び）で情報の交換をしていました。³ しかしもうインカ文明やマヤ文明を文明でないと言う人はいないでしょう。文字・金属器・都市の「文明の三要素」は、畑作牧畜民の文明の定義に必要な文明の三要素であって、東洋の稲作漁撈民の文明は農山漁村にもあるというのが私の指摘³⁰です。

縄文にも文明はある。レヴィ・ストロースもアマゾンの熱帯雨林の中で暮らす少数民族が文明を持っていたと指摘してしました。都市・文字・金属器をもったもの以外は文明ではないと定義してしまいますと、私たちが学んできた文明とは欧米の畑作牧畜民の文明であって、比較文明学会は欧米人の世界史・文明史を学ぶ学会になってしまう。そうはさせたくないというのが私の思いなのです。

比較文明学会を新たな文明の時代を創造する場にした。そのためには「稲作漁撈民も縄文人も文明を持っていたのだ⁽³⁰⁾」ということを知る必要があるのではないか。もちろん比較文明学会は都市・文字・金属器を持ったものだけを文明とよび、それを研究するのだといわれる方もおられるでしょう。でもそれは偏った畑作牧畜民・欧米人の世界史・文明史で世界をみることになるのではないか。

梅棹忠夫先生は「文明とは制度・組織・装置系のハードウェア⁽¹⁸⁾」だ、

伊東俊太郎先生は「文明は制度・組織・装置系のハードウェア⁽¹⁹⁾で移転可能

文化は文明のエートスや価値観で移転不可能」と定義された。これにたいし文明とは「あこがれられるもの」という川勝平太

先生の指摘があります⁽³¹⁾。

二〇一六年四月一二日東京の全国町村会館でおこなわれた「農村文明塾設立準備総会」の基調講演で、あらためてこの川勝説をお聞きして、なるほどなと思いました。今、人々があこがれているものは何か。これが重要です。都市だけに人々はあこがれていない。東京の大都市に暮らす人々が農村にあこがれて移動をはじめている。都市市民だけが文明を持っているのではなく、アジアの人類世 (Anthropocene)⁽³²⁾には、農村も文明をもっているという視点が必要なのではないでしょうか。いや農山漁村こそあこがれる対象になりつつあるように思うのです。

こうしたことを議論するのが比較文明学会であって、欧米人の文明史観を議論するところが比較文明学会ではないと私は考えるのです。文明の概念はもう欧米人の世界史・文明史をとびこえて、あらたな時代にはいったのだと思います。これからは日本人が、世界の人々が納得するような文明概念を創造し、新しい文明の時代を作り上げていく時代だと思えます。

思いは伝わる

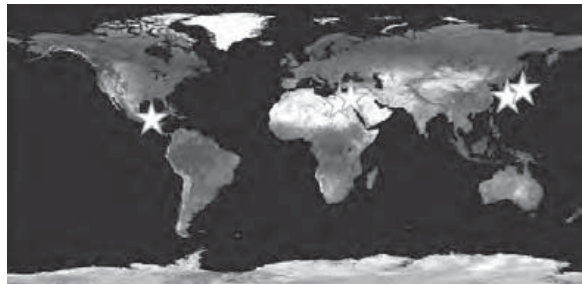
私が研究しておりますのは、年縞 (varved (annually laminated) sediments) というものです。今まで過去を調べるのは、放射性

の炭素同位体という方法を使って、±1000年というような統計上の誤差が付いていたわけです。ところが、湖の底をずっと調べていきますと、例えば、福井県の水月湖、あるいはイスラエルの死海、あるいはエジプトのカルーン湖、グアテマラのペテシユバトゥン湖とか、あるいは秋田県の目潟、こういった所で年縞というのが見つかったわけです(図2)。

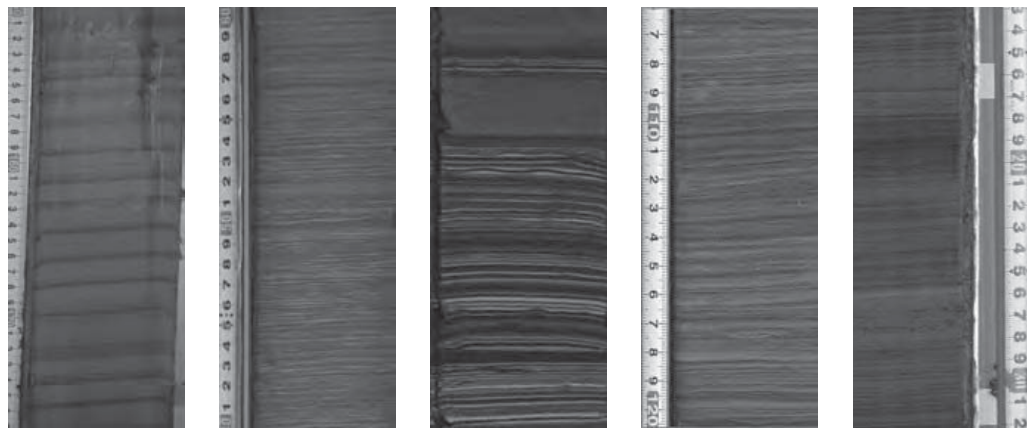
欧米文明の人々は、時間を支配することが文明を支配することだと考えた。江戸時代の日本人は、現在と異質の大陰暦で暮らしていた。現在のようになったのは、明治維新以降のことです。ヨーロッパの太陽暦、グレゴリウス暦に従った時間軸の元で、時間が推移するようになった。現在の時間軸の基本はイギリスのグリニッジ天文台にあることからみても、時間を支配するということが、いかに重要なことかわかる。

私が福井県の水月湖で年縞を発見したのが一九九三年でした。一九九三年に水月湖の湖底で年縞を発見したんですけれども、世界の標準になることはありませんでした。

二〇一二年の福井新聞の記事を紹介します。向かって左の一番奥、これがサイエンスのエディターです。二番目が中川毅さん。今は立命館大学教授をしていますけれども、もともとはイギリスのニューカッスル大学の教授をしていました。三番目が北川浩之



世界の中緯度の温帯。
亜熱帯地域で発見された年縞
(山田和芳氏提供)



ベテシユバトゥン湖 (グアテマラ) カルーン湖 (エジプト) 死海 (イスラエル) 水月湖 (日本福井県) 一ノ目潟 (日本秋田県)

図2 温帯・亜熱帯地域の年縞 (山田和芳氏提供)

さんで名古屋大学教授です。この二人は私の弟子というとおこがましいですが、いっしょに年縞を研究してきた仲間です。私は一九九三年に年縞を見つけたのですが、世界の人々はうんと言わなかった。ところが彼らが一生懸命年縞を研究してくれました。そしてとうとう福井県水月湖の年縞から明らかになった過去の時間軸が、世界の標準になったわけです。

二〇一二年の記者発表にはサイエンスのエディターまでがやって来た。北川教授と中川教授の二人の研究者が水月湖の年縞の研究を行って、アジア人が作ったスタンダードが、世界のスタンダードになったのです。

文明も同じです。「あなたたち欧米人が作り出した物質エネルギー文明は素晴らしい。こんな豊かな物質に恵まれた環境を作った。しかし、あなたたちの文明の原理は自然を一方的に収奪するものではありませんか。アジアの稲作漁撈社会、あるいは縄文社会は、この美しい自然とともに、千年も万年も生き続けることに最高の価値を置いていますよ」と言えなければいけないのではないか。そのことを彼らに認めさせないといけないのではないか。それを認めさせるには、東洋の稲作漁撈社会、あるいは縄文の社会が半分、そして西洋のキリスト教を中心とした物質エネルギー文明の世界が半分、半分半分で、これで東洋と西洋のバランスを取

ってうまく行く必要があるのではないか。東洋と西洋が融合するというふうになればいいかもしれません。でもそれは簡単なことではありません。

そのためには、私たちの命には限りがありますから、後継者をどう育成するかが重要な課題になります。私は梅原猛先生と伊東俊太郎先生の思想に影響されて、梅原先生と伊東先生の教えを一生懸命になって勉強した。それで私なりの事をやった。でも私の考えを次の世代に伝達しなきゃいけない。

人の思いは伝わるということです。弟子を作ることができる人は幸せです。何もそれは弟子じゃなくても、自分の家族に理解してもらおう。ここにいらっしやる方で、おじいさんやおばあさんは、お孫さんもいらっしやるでしょう。だったらそのお孫さんに、自分の思いを伝えることが重要です。それが自分が生きた証です。自分の命はあと二〇一三〇年もすれば無くなるんですから。でも、その時に自分の事を忘れないで継承してくれるのは誰か。それは弟子であり家族であり後継者です。その思いを伝える。これが何よりも私は重要なことだと思えます。

最澄さんという人がいます。最澄さんは『天台本覚論』で「草木国土悉皆成仏」、生きとし生ける者はみんな仏だということをおっしゃった。でも最澄さんが死ぬ時には、南都六宗の人々は

「反最澄」で固まっていた。

最澄さんは「一向大乘戒壇」を指摘された。それは、「女性も生きとし生ける者はみんな往生できる」という教えです。それに対して南都六宗の人がNoと言った。その代表が徳一さんです。徳一さんはそうじゃない「ちゃんと修行しなければ仏にもなれないし、女性はましてや往生できない」と言われた。ところが最澄さんは、「生きとし生ける者、全てが仏になれて往生できるんだ」と言われた。でも最澄さんは、全く評価されることなく、不遇のうち死んでいかれた。でもそのときは不遇でも、最澄さんは、一二〇〇年後の今日でも生きておられるわけです。今、評価されなくても一〇〇〇年後にはきつと評価されるときが来る。自分の考えがあと一〇〇年後に評価される、一〇〇〇年後に評価されるかもしれない。そう思って生きてほしいものです。

結論

それでは今日お話ししたことをまとめたいと思います。

①自然への畏敬の念を醸成する科学を、もう一度取り戻さなければいけない。あまりにも自然を支配して、人間の王国を作るという事にとられ過ぎてきた。だからもう一度、自然への畏敬の念を醸成するような科学をやらなければいけない。

②風土の力が人を作るということの再認識。風土の力がやっばり人間を作っているんです。私を環境決定論者だとして排斥してきた地理学者は、多少は反省していただきたい。戦後日本の歴史学と地理学は日本を変な方向に導いていった。これをもう一度、正しい方向に戻さなければいけない。

③自然を一方的に収奪する文明からの脱却。たとえば欧米文明が半分、日本文明が半分。われわれが今まで崇拜してきた物質エネルギー文明というのは、自然を一方的に収奪する文明だった。そんなことをやっていたら、あと三〇年しか地球は持たない。私³はこのままいけば、二〇五〇年から二〇七〇年に、現代文明は崩壊すると指摘しております。

④日本人のライフスタイルの基本には、森・里・海の命の水の循環を数千年にわたって守り伝えてきたライフスタイルがある。このライフスタイルをもう一度取り戻してもらいたい。

⑤縄文が文明かどうかということは異論があるでしょう。私に對する反論が当然展開されますから、それも皆さんどうぞ聞いていただき、これから縄文は文明かどうかについて議論していただきたいと思います。

⑥日本人の思いを後世に伝えていくことが大事。思いを伝えてくれるような後継者を育成する。私は、「ふじのくに地球環境史

ミュージアム」の館長の名刺を持っております。その名刺には「一〇〇年後の静岡が豊かであるために」という標題がついています。自分の一生はせいぜい一〇〇年。でも自分の思いをあと二〇〇年、五〇〇年、一〇〇〇年続けるためには、思いを伝える後継者を育成することが重要です。私は「一〇〇年後の静岡が豊かであるために」ということを、一言も言ったことはないです。でも六名の若い研究者が考えて、安田先生が言っている事はこういう事だと。だからこういうふうにしようと言って「一〇〇年後の静岡が豊かであるために」という標語を作ったのです。

私のお話したかったのは以上でございます。ご清聴ありがとうございました。

文献

- (1) Oswald A.J. Spengler, (1918,1922) *Der Untergang des Abendlandes, vol.1, no.2* : O.シュペングラー(村松正俊訳)『西洋の没落』五月書房 一九七七年
- (2) O・シュペングラー(村松正俊訳) : 『西洋の没落』ニューエディション 五月書房 二〇一五年
- (3) 安田喜憲『環境文明論・新たな世界史像』論創社 二〇一六年
- (4) 伊東俊太郎編著『人類文化史2 都市と古代文明の成立』講談社
- (5) 安田喜憲『世界史のなかの縄文文化』雄山閣 一九八七年
- (6) 梅原猛・伊東俊太郎・安田喜憲総編集『講座 文明と環境 全一五巻』朝倉書店 一九九五―一九九六年
- (7) 羽田正『新しい世界史へ』岩波新書 二〇一一年
- (8) 和田茂・永原陽子・羽田正・南塚信吾・三宅明正・桃木至朗編著『世界史の世界史』ミネルヴァ書房 二〇一六年
- (9) 池田大作『池田大作全集 全一五〇巻』聖教新聞社 一九七三―二〇一五年
- (10) 廣池千九郎『廣池博士全集 全四巻』モラロジー研究所 一九七五年
- (11) 渡辺公三『闘うレヴィーストロス』平凡社新書 二〇〇九年
- (12) Karl Marx (1867) *Das Kapital*. Hamburg : Verlag von Otto Meissne.,
- (13) 稲盛和夫『生き方』サンマーク出版 二〇〇四年
- (14) 鈴木秀夫『森林の思考・砂漠の思考』NHKブックス 一九七八年
- (15) 吉沢五郎『旅の比較文明学』世界思想社 二〇〇七年
- (16) Yasuda, Y., Kitagawa, H., Nakagawa, T. : 'The earliest record of major anthropogenic deforestation in the Ghab Valley, northwest Syria. *Quaternary International*, 73, 127-136, 2000.

- (17) Yasuda, Y. (ed.): *Forest and Civilisations*. Lustre Press and Roli Books, Delhi, 2001.
- (18) 梅棹忠夫「文明の生態史観序説」中央公論 二月号 一九五七年
梅棹忠夫『文明の生態史観』中央公論社 一九六七年
梅棹忠夫『梅棹忠夫著作集 全二巻 別巻一』中央公論社 一九八九
—一九九四年
- (19) 伊東俊太郎『比較文明と日本』中央公論社 一九九〇年
伊東俊太郎『伊東俊太郎著作集 全一二巻』麗澤大学出版会 二〇〇八
—二〇一〇年
- (20) 藍野裕之『梅棹忠夫…未知への限りない情熱』山と溪谷社 二〇一
一年
- (21) 村上和雄『サムシング・グレート』サンマーク出版 一九九九年
- (22) 稲盛和夫『京セラフィロソフィ』サンマーク出版 二〇一四年
- (23) 欠端 実『聖樹と稲魂』近代文芸社 一九九六年
欠端 実「稲作漁撈文明と人類の未来」安田喜憲ほか『文明の風土を問
う』麗澤大学出版会 二〇〇六年
- (24) 矢野健一『土器編年みる西日本の縄文社会』同成社 二〇一六年
- (25) 安田喜憲『生命文明の世紀へ』第三文明社 二〇〇八年
- (26) 安田喜憲・阿部千春『津軽海峽圏の縄文文化』雄山閣 二〇一五年
- (27) 安田喜憲『二万年前』イーストプレス 二〇一四年
- (28) 福沢諭吉『文明論之概略』岩波文庫 一九九五年
- (29) 青山和夫『古代マヤ 石器の都市文明』京都大学学術選書 二〇〇
五年 青山和夫『マヤ文明』岩波新書 二〇一二年
- (30) 安田喜憲『稲作漁撈文明』雄山閣 二〇〇九年
- (31) 川勝平太『富国徳論』紀伊国屋書店 一九九五年
川勝平太『日本の理想ふじのくに』春秋社 二〇一〇年
- (32) Hudson Mark: *Placing Asia in the Anthropocene: Histories, vulnerabilities,
Responses. The Journal of Asian Studies*, vol. 73, pp. 941–962, 2014.